

無名作家の日記

—— 映画文学人生論

原作：菊池寛 (1918) 「中央公論」

参考：藤十郎の恋 (1919) 「大阪毎日新聞」

恩讐の彼方に (1919) 「中央公論」

半自叙伝 (1928) 「文藝春秋」

眼中の人 小島政二郎 (1942) 「三田文学出版部」

俺は、文学に志す青年が犯し易い天分の誤算を、やったのではあるまいか

菊池寛の『無名作家の日記』は大正七年、「中央公論」に発表された。その時点での作者は無名作家ではない。

無名作家が「中央公論」から原稿を依頼されることはまずあり得ないからだ。この小説は現在の事実をありのままに書いたリアリズムの文学（私小説や写生文）ではないということになる。

しかし、東京の友人たちが華々しく文壇に登場したとき、一人だけ京都でくすぶっていた頃の無名作家の嫉妬、焦燥、劣等感を誇張して描いた心理的リアリズムの文学とはいえる。

問題は誇張だと思う。心理的リアリズムの文学に誇張が許されるとしても、事実と反するような誇張に読者は違和感を覚えるかもしれない。

この小説にはモデルがいる。主人公の俺は菊池寛、友人の山野は芥川龍之介、桑田は久米正雄、杉野は松岡譲、川瀬は成瀬正一——第四次新思潮の同人たちだ。すでに文壇で活躍し、彼らの目標になっているという川崎純一郎は、第三次新思潮の谷崎潤一郎だろう。

小説では、京都にいる無名作家の俺には同人雑誌発行の計画については連絡があったが、君も同人になってはどうかという誘いはなかった。俺は激しい嫉妬と憤（いきどおり）とを感じると同時に突き放されたような深い淋しさを感じずには居



無名作家の日記

映画文学人生論

られなかった。俺は、文学に志す青年が、動（やや）もすれば犯し易い天分の誤算をやったのではないかと心配になる。

これは事実ではない。菊池寛は第四次新思潮に参加し、同人五人の中に名をつらねている。創刊号用として送った戯曲『藤十郎の恋』は、同人たちの読み合わせで否定されたが、その代わりに書いた戯曲『暴徒の子』は創刊号に掲載された。その後、『藤十郎の恋』は大阪毎日新聞に連載されただけでなく、舞台や映画で評判をとった。

誇張はリアリズムの文学では否定される傾向にあるが、俗受けをして、読者の共感や同情をかちとることがある。通俗文学や映画、演劇では誇張的表現が効果をあげることがある。菊池寛が戯曲や通俗小説を書き、さらには雑誌『文藝春秋』を発行して成功したのはそのことに気がつき、実行したからだといえないこともない。

しかも、無名作家の心理を知る彼は通俗文学だけではなく、それほど面白くもない純文学の価値にも注目し、戦略的に売るしくみを思いついた。昭和十年に純文学の新人を対象とした芥川賞、大衆文学のための直木賞を設け、現在に至るまで無名作家に希望を与え続けている。

芥川龍之介の命日は七月二十四日。河童忌ともよばれる。

年毎の二十四日のあつさ哉

菊池寛